

News Letter

宮城学院女子大学 ジェンダー教育研究センター

2026.1

Vol. 1

MGUジェンダー教育研究センターの設立にあたって ～生き方を尊重する社会へ——その学びの拠点として～

MGUジェンダー教育研究センター長・一般教育部 教授 石田 依子



MGUジェンダー教育研究センターは、ジェンダーを切り口に、教育・研究・地域連携を結びつける拠点として、2025年度、活動を開始しました。本センターが目指すのは、ジェンダーを一部の人のための特別なテーマとしてではなく、誰もが自分らしく生きるために不可欠な、社会の基盤的な課題として捉え直すことです。

宮城学院女子大学は、長い歴史の中で、一人ひとりの尊厳を重んじ、自他を尊重する人材を育成する教育を積み重ねてきました。その姿勢は、本学が2019年に「共生のための多様性宣言」を表明したことにも表れています。本学は、性的指向・性自認をはじめ、すべての学生の個人的特性や文化的背景を尊重し、そのための環境づくり力を注いでいます。女子大学としてこうした選択を行っていることは、社会的には先進的な取り組みと受け止めら

れるかもしれません。しかしそれは、決して特別な配慮や例外的な対応ではありません。人が自分のあり方を自分で選び、自分らしく生きることは、本来ごく自然で、誰にとっても等しく保障されるべき当然の権利だからです。

MGUジェンダー教育研究センターは、こうした本学の理念と実践を明確に言語化し、教育・研究・社会実践へとつなげていく役割を担います。そして、本センターは、学部・学科を越えた学びの場をひらき、学生が自ら問いを立て、他者との対話を通して考えを深めていくことを重視します。知識を一方向的に受け取るのではなく、違いに向き合い、考え続ける力を育むことこそが、ジェンダー教育の核心であります。

本センターは、地域社会とも連携しながら、多様な立場の人々が出会い、学び合う「対話の拠点」となることを目指します。誰もが安心して声を発し、互いを尊重しながら未来を構想できる場として、このセンターを育てていきたいと願っています。

ジェンダー教育研究センター設立に向けた取り組み

設立準備委員会座長・生活文化デザイン学科 教授

藤田 嘉代子



24年の設立準備委員会では、何もなかったところからのスタートでしたので、ジェンダー系センターの運営について他大学に視察に行ったり、副専攻の仕組みについて問い合わせたり、自分でいうのもなんですがアクティブに働き、現センターの基盤を

他の先生方と一緒に作りました。地方の私立女子大学でどんな取り組みができるか、他大学のよい事例に学び、ネットワークをさらに作りながら、学生のみなさんが「面白い」「やってみたい」と思えるセンターを目指したいと思います。

MGUジェンダー教育研究センターの設立に寄せて

ジェンダー教育研究センター顧問・本学名誉教授

天童 睦子



本学は前身の宮城女学校設立（1886年）からまもなく140周年を迎えます。東北随一の女子大学としての歴史と実績をもとに、女性のエンパワーメントに向けた教育を担っています。キリスト教主義に基づく建学の精神は、平

等、公正、多様性の尊重といったジェンダー平等社会の土台ともつながります。本センターの新設は大学の教育資源を地域に開き、女性のリカレント教育、心身の健康・スポーツ等を通じた実践的学びの契機となるでしょう。

MGU ジェンダー教育研究センター設立キックオフイベント開催報告 ～宝塚の“男役”から見える、これからの性のかたち～

MGUジェンダー教育研究センター長・一般教育部 教授 石田 依子

MGUジェンダー教育研究センターの活動の第一歩として、2025年10月19日、キックオフイベント「宝塚の“男役”から見える、これからの性のかたち」を開催しました。本イベントでは、元宝塚歌劇団雪組トップスターの杜けあき氏をお迎えし、舞台表現を通して培われた経験をもとに、「性の表現」や「自分らしく生きること」をテーマに対談を行いました。

当日は、行政関係者や政治の分野で活躍されている方々、地域で男女共同参画に携わる関係者など、多様な立場の来賓の皆さまにもご出席いただき、大学という学びの場と地域



社会とが交差し、本センターの取り組みを広く共有する機会になったと思います。

本イベントの大きな特徴は、学生が対談の担い手として舞台上に立ったことです。本学の学生2名が登壇し、それぞれの専門分野での学びや、日常生活の中で感じている疑問や違和感をもとに、自らの言葉で問いを投げかけました。学生主体の対談は、ジェンダーを「知識」ではなく「対話を通して考え続けるテーマ」と捉える本センターの姿勢を明確に示しました。聴衆

も議論に引き込まれ、自身の経験や価値観と重ねて考える時間となり、キックオフイベントとして大きな成果でした。

学芸学部 心理行動科学科3年 菊地 羽音

MGUジェンダー教育研究センター設立記念キックオフイベントに参加し、「みんな違ってみんないい」、「自分らしさという言葉は安易に使わない」ということの大切さを改めて実感しました。生きていく上で自分というものを失ってはいけなく私は考えています。その「自分」は決めつけられたくないし、簡単に言葉で表現できるものではありません。こうした思いを抱いた上で、イベントでの語りを振り返ると、私は大人の人に明確な答えを求めていたわけではなかったし、むしろ、答えを示されることよりも、迷いながら選び続けてきた過程にこそ意味があると感じました。生き方や価値観は、置かれた状況や関係性によって変化し、一つの基準で測れるものではありません。今回のイベントを通して、他者の考えに触れ、耳を傾けることこそが、自分自身のあり方を問い直すきっかけになると感じました。

学芸学部 人間文化学科1年 角川 いくほ

今回の対談で、男性を演じていた杜けあきさんからこそ話せる貴重なお話を聞くことができました。私はジェンダーについて考えるとき、どうしても自分の性である女性に偏った考え方をしてしまっていると思います。ですが男役・女役の両方演じてきたけあきさんは、性別ではなく、自分自身の思いや生き方を大切にしていることが伝わってきました。その言葉や表情を見て、ジェンダーについて考えるときに必要なのは、女性か男性かではなく「ひとりひとりが人間としてどう生きるのか」という視点なのではないかと感じました。性別で区分せず、人間にとってやわしい世界にするための新しい気づきをくれたけあきさん、そして素敵な機会をくれたMGUジェンダー教育研究センターの先生方、本当にありがとうございました。

ジェンダーカフェ2025

学生・教職員・地域市民がともにジェンダーについて考える対話の場

本センターでは「ジェンダーカフェ」を定期的に開催しています。2025年度は4回開催しました。

第1回 7月15日 昼休み C203

ジェンダーギャップ指数の最新版紹介と ジェンダーバイアスを考えるクイズ

本センター長 石田 依子

ジェンダーギャップ指数の最新データを紹介し、日本における現状と課題について考察しました。さらに、ジェンダーバイアスを考えるクイズを通じ、学生たちと共に日常に潜む思い込みに気づく機会を共有しました。

第2回 10月31日 16時20分—17時50分 C305

大学生として自分の身体と向き合う 女性診療の現場から

講師 尹玲花氏
(mammaria tsukiji院長・乳腺外科専門医)

乳腺外科専門医の立場から、若い世代が知っておきたい、健康のポイントについて、また医師としてのご自身のキャリア形成について興味深いお話をうかがいました。

第3回 11月11日 昼休み C306

教育と尊厳—ロヒンギャ女性の人權とエンパワーメント 本学人間文化学会主催・本センター共催の講演会

講師 内海摩耶氏
(プラン・インターナショナル・ジャパン・プログラム部)

ロヒンギャ難民の、女性や子どもに対して、NGOプランがどのような支援活動を行っているのか具体的にうかがいました。教育が尊厳と人權を守る重要な力となるという講師の言葉に、共感しました。



第4回 12月17日 昼休み C502

『82年生まれ、キム・ジヨン』以後の 韓国ジェンダー事情

全美利氏 本学大学院修士課程修了

ソウルで韓国語教師として活躍するゲストスピーカーとオンラインでつなぎ、司会の早矢仕先生のリードで、韓国の女性たちの意識変化と行動変容、男性たちとのまじりのリアルをうかがいました。



各回とも学生が自発的に参加し、活発な質問が出て盛会でした。

副専攻

MGUジェンダー教育研究センターでは、学部・学科を越えてジェンダーを体系的に学ぶ副専攻「ジェンダー研究コース」を設けています。本副専攻は、専門分野での学びにジェンダーの視点を重ねること、自分自身の生き方や社会との関わり方を問い直すことを目的としています。2025年度は、教育学部教育学科健康教育専攻2年生、学芸学部日本文学科3年生、学芸学部人間文化学科3年生

の計3名が履修し、それぞれの専門と問題意識を結びつけながら学びを深めています。ジェンダーを通して得られるのは、知識の蓄積にとどまりません。自分の前提を疑い、他者との関係を捉え直し、これからの生き方を主体的に構想していく力——その土台を形づくる学びが、ここにあります。今後は、こうした学びをより多くの学生へとひらき、学部や専門を越えてジェンダーを考える実践の輪を広げていきます。

測ることから始まる、地域の健康づくり

今年度からスポーツ安全協会の助成を受け、健康・スポーツ事業は「みやすぽプロジェクト」として本格始動しました。

9月にはNTT東日本仙台との連携により、オフィスワーカー向けの健康・体力測定を実施し、体組成や筋力、野菜摂取量などを測定したところ、特に若年世代の野菜摂取量の少なさが目立ちました。また11月には、東松島市の婦人科健診会場で行われた「ベジまつり」にて、野菜摂取量の測定を行い、性別や年齢、地域によって健康課題が異なることを実感しています。

今後は、測定だけでなく継続的な運動習慣につなげるため、大学を拠点とした女性向け運動プログラムを現在準備中です。性別や年齢を問わず、誰もが健康づくりに取り組める地域の拠点を目指していきます。



生活科学部
食品栄養学科
准教授

丹野 久美子



学芸学部 英文文学科
准教授

酒井 祐輔

ウルフ研究とジェンダー

フェミニズムの文脈でよく参照される作家ヴァージニア・ウルフをテーマに博士論文を執筆しました。日本のウルフ協会にも所属しています。私の主要関心は文学と近代の政治や経済との関係ですが、研究仲間にはフェミニズムを研究されている方が多いので、ジェンダーは比較的身近に感じているテーマです。男性（と一言で括っているのかわかりませんが）に期待されることも刻々と変化しているので、日常ベースで考えていければと思います。

スポーツの変化から、ジェンダーを問い直す

スポーツの世界では、近年のオリンピック・パラリンピックで男女混合種目が大幅に増加しました。女性アスリートや障がいのあるアスリートの環境改善など、スポーツ界の仕組みが変化しつつあります。この大学で学生や教員と関わる中で、スポーツ界の変化とジェンダー教育の重要性につながりを感じています。自分の中にも無意識の思い込みがあるかもしれない。男性である私も学び続け、センターでの活動を通して、自身や世の中の思い込みに気づき問い直していきたいです。



一般教育部 助教
渡辺 圭佑

センター員（五十音順）

青木 拓巳	教育学科 准教授
石田 依子	一般教育部 教授・センター長
栗原 健	一般教育部 准教授
小羽田 誠治	一般教育部 教授
酒井 祐輔	英文文学科 准教授
櫻井 美幸	人間文化学科 准教授
清水 禎文	教育学科 教授
丹野 久美子	食品栄養学科 准教授
天童 睦子	名誉教授・センター顧問
戸野塚 厚子	教育学科 教授
早矢仕 智子	一般教育部 教授
藤田 嘉代子	生活文化デザイン学科 教授
松本 周	一般教育部 教授
八木 祐子	人間文化学科 教授
渡辺 圭佑	一般教育部 助教

<編集・発行>

宮城学院女子大学 ジェンダー教育研究センター

ニューズレター

News Letter

2026.1
Vol.1

〒981-8557

仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1

宮城学院女子大学

<TEL> 022-277-6932

<E-mail> gender-c@mgu.ac.jp



センター HP